

# 吉野作造の朝鮮観

## ——天道教を中心に——

陳 宗炫

### はじめに

吉野作造（1878-1933）は、帝国主義に走っていた 20 世紀初頭の日本において独自の民本主義を提唱したことでよく知られている。とりわけ、日本が朝鮮と満州を植民地支配していく時期に、被支配側の待遇改善を唱えたことで評価される<sup>1</sup>。本稿では、自らの論理にもとづいて朝鮮の自治を主張した吉野が、その一環として注目した天道教の展開と思想を分析しながら、吉野の朝鮮観を確認したい。

吉野の朝鮮に関する論説は 1916 年よりはじまる。彼の講演や寄稿論文は 1919 年を頂点とし、1921 年を機に減少していく。その大多数が日本の朝鮮支配にかかわる内容である。特に日本の朝鮮支配政策が武断統治から文化統治へ方向転換する契機となった三一運動（1919 年）の勃発後は三一運動を主導した天道教に注目していることが読み取れる。吉野の朝鮮観に関する研究は松尾尊兌のものが代表的であり、吉野の足跡を忠実に辿りながら分析している。松尾は、朝鮮の知識人や在日朝鮮人留学生との交流、朝鮮の自治及び同化に関する支配政策の変化を中心に吉野の朝鮮観を分析している。しかし松尾の研究成果においては、三一運動後、吉野が当時の日本人と朝鮮人の関係改善のために注目した天道教の理解に関する言及が少ない。

天道教は、朝鮮末期に発生した東学の思想を継承して 1905 年に誕生した韓国の宗教であり、後に韓国で発生した宗教に多大な影響を与えている。墮落した社会に対する民衆の改革思想を継承している天道教は、外勢の侵略に対する抵抗意識を根底にもっているため、20 世紀末の日韓関係をみるにあたって重要な題材となる。

以下では、吉野と朝鮮との出会い、天道教の前身といえる東学の思想と天道教の誕生、そして吉野が注目した時期の天道教の展開と活動を概観する。上記のことを踏まえ、吉野の朝鮮観について考えたい。

## 第一章 吉野作造と朝鮮

本章では、吉野の朝鮮観への理解を助けるために吉野が朝鮮と関係をもつようになった経緯を確認する。

### 第一節 朝鮮との出会い

吉野と朝鮮との出会いは朝鮮問題研究会からはじまる。吉野は 1904 年に東大を卒業し、

その後もキリスト教の本郷教会で事務をつとめていた。この頃、教会で信心深い朝鮮人留学生の李殷徳と知り合う。これをきっかけに朝鮮に興味をもつようになった吉野は、親友の千葉亀治と力を合わせ、島田三郎を招いて本郷教会で「朝鮮に対する日本人の職分」と題する講演会を開く。これを発端に朝鮮問題研究所を結成する。しかし、朝鮮問題の重要性を認識して朝鮮に関する研究を続けると決心したものの、研究内容を社会に発信するのは時期尚早であるという友人の話に同意して朝鮮問題研究会から手を引くこととなった<sup>2</sup>。朝鮮問題研究会を離れてから約 10 年間吉野は朝鮮問題に関する筆を絶つが<sup>3</sup>、1913 年 7 月ヨーロッパ留学からの帰国後、東大 YMCA を通して金雨英などの朝鮮人青年と知り合う<sup>4</sup>。

領土拡大を計る当時の日本において、朝鮮との関係は身近な問題であったろう。このような時代を背景に、朝鮮人と出会うことによって吉野の朝鮮に対する関心は高まったのである。

## 第二節 満韓視察を経て

吉野は 1916 年の 3 月から 4 月にかけて約 3 週間の日程で朝鮮と満州を視察し、同年、その感想を諸雑誌に発表した<sup>5</sup>。朝鮮視察の目的は、日本の統治に対する朝鮮人の批評を聞くことにあると記されている<sup>6</sup>。本節では、「満韓を視察して」を中心に、三一運動以前における吉野の朝鮮観を日本の朝鮮支配政策との関連から分析する。

吉野は日本の朝鮮支配政策と朝鮮に居住している日本人の態度を問題視しながら、道路建設の際に没収される朝鮮人の財産、朝鮮人官吏の待遇、言論自由の保障などの改善を論じている<sup>7</sup>。さらに、朝鮮人の同化問題を取り上げ、同化は国家的問題のみならず、国民的問題でもあると主張する<sup>8</sup>。この点において、官憲の役割はもとより、朝鮮人に対する日本人の態度、つまり、民間レベルの円滑な交流が必要であると披瀝する。たとえば、「満韓を視察して」には、

予は勿論、朝鮮民族が同化して全然日本民族と一になると言ふことを必ずしも丸で不可能なりと軽々に断定する者ではないが、今の日本人の状態では余程困難であると云ふことだけは之を認めざるを得ない。少なくとも同化の為めの各般の努力をば全然之を官憲に任して、人民は毫も之と歩調を合せず、事毎に朝鮮人を蔑視し虐待して居るやうでは、到底同化の実を挙ぐることは出来ない<sup>9</sup>。

と、朝鮮人と日本人の同化を実現するためには朝鮮人に対する蔑視と虐待をやめなければならないと強調する。上記の文章は、日本人の態度に対する吉野の考えをよく表している。同化の具体的な内容を提示してはいないが、形式上の同化政策ではなく、朝鮮人と日本人が友好的になることに同化の意義を見出そうとしているのが見受けられる。

一体日本人は概して宗教の民心に及ぼす力と言ふものを余りに軽視するの弊がある。

(中略) 宗教の真理程之を信ずるものから観て絶対の尊敬を受くものも無い。これを信ずるものにつて宗教の真理は生命にも換え難い最上無二の尊貴なものである。国

家の威厳を以てするも、場合に依つては之を犯す事は出来ない。(中略)支那や朝鮮に於て、在留商民が私利を図って土民を困めるの状は、日本人も外国人もさう著しい差は無いと思ふのであるが、然し外国人の中には時々多年支那や朝鮮の内地に入り込んで、一身を犠牲に供して誠心誠意、土民の為に尽くして居るものが尠くないので、土人は即ち殆んど先天的に此等外人の尊敬すべき事実を見聞して居るから、他に少し位悪い奴があつても全体として深く之を意に介しない。日本人側には之がない。故に少しの事でも直にボイコットなどの種になる<sup>10</sup>。

このように吉野は、宗教が民心に及ぼす力の重要性をも強調する。西洋人であるキリスト教の宣教師の例を挙げ、国家や個人レベルの収奪から発生する被支配者側がもつ悪感情は、宗教的理念にもとづく実践が尊敬を感得させることによってある程度相殺されるという<sup>11</sup>。宗教活動の重要性に関する言及は「満鮮旅行の感想—日本宗教家の奮起を望む—」にもみられる。日本の朝鮮支配の態度に問題があると感じた吉野は、日本人の植民地経営における資質を問うており、特に宗教家の活躍が重要であると指摘する<sup>12</sup>。私利私欲を捨てた宣教師の献身に対する感動の効果を力説しながら、差別的待遇を緩和させる装置として宗教的理念にもとづく実践を彼は主張した。

### 第三節 三一運動以後

三一運動の勃発後に発表された吉野の文章には、朝鮮人に対する差別的待遇の撤廃、武人政治の撤廃、同化政策の放棄、言論自由の拡大などがより強く論じられている<sup>13</sup>。上記のことは、支配側である日本の問題として吉野が取り上げた内容である。では、吉野は朝鮮側をどのように理解したのか。三一運動の背後にある民衆の動きに注目した吉野はその底辺に興国への念願があると考え、天道教が興国思想の現れであると判断した<sup>14</sup>。さらに、「従って鄭鑑録に基く迷信は、日韓併合後民間に一段と高くなつたと云ふ事である」と記しているように、その背景には日韓併合以前の朝鮮時代から蔓延していた予言書である『鄭鑑録』の多大な影響があると考えた<sup>15</sup>。

右(筆者注—『鄭鑑録』)の様な迷信が普ねく行き渡つて居る事、而して此迷信が作今ことに強くなり、独立運動などの根底ともなつて居る事を指摘しておく。更にも一つ注意して置きたい事は、此迷信は今に始つた事ではなく、既に数十年の昔に在り、此迷信に基く一種の運動として東学党の乱があつたと云ふ事である。(中略)而して最近の独立運動の中堅を為す天道教は、実に東学党の一変形とも観るべきものであるから、鄭鑑録の迷信は最近天道教を通じて大に世間を騒がしてゐると謂つていい<sup>16</sup>。

吉野の『鄭鑑録』理解をみると、①官吏腐敗→②豪族の横暴→③民衆の苦難→④外国との戦乱による亡国→⑤英雄による救国の順になっている。①から④の内容が朝鮮亡国と日韓併合によって実現されたため、次は⑤が到来すると朝鮮人が信じていると吉野は分析した<sup>17</sup>。三一運動で主導的役割を果たした天道教は、『鄭鑑録』の思想が働いたものであるというのが吉野の理解である。天道教を主題とする最後の著作である「小弱者の意気—日本と

朝鮮との交渉に関する研究の三」の文末に吉野は

朝鮮人の心理に国民的英雄の観念の生まれた事は、朝鮮政治史の上に他日著大なる一時期を劃すべき出来事でなければならぬ。日本と朝鮮との関係を観察する者、殊に両者の関係につきての策を立つる者は、此辺の事情に特別深き内面的省察を加へなければならぬ<sup>18</sup>。

といい、国民的英雄への願望を理解することが日朝関係を問題なく発展させるために重要であると示している。次章からは、吉野が朝鮮理解のために注目した天道教の性格を、『鄭鑑録』、東学との関連から確認したい。

## 第二章 『鄭鑑録』・東学・天道教—継承されるメシア信仰—

吉野作造は、植民地期の朝鮮人における救国願望の思想的背景が『鄭鑑録』であり、それが具現化されたのが天道教だと考えた。本章では『鄭鑑録』から東学を経て天道教に受け継がれたメシア信仰を確認したい。

### 第一節 朝鮮末期の社会情勢と『鄭鑑録』

19世紀の朝鮮は李氏23代目の純祖（在位1801-34）が王となっていた。純祖は11歳の1801年に即位しており、安東金氏の金祖淳の娘が王妃となった。これによって、安東金氏一族による勢道政治がはじまる<sup>19</sup>。権力を独占した安東金氏による官職売買など、政治の腐敗によって民衆の生活は困窮を極めた。このような社会情勢の中で勢道政治を糾弾し、その滅亡を予言する書物が流布していた。その代表的なものが『鄭鑑録』である。『鄭鑑録』にみられるメシア信仰は東学の思想と密接な関係があるため、『鄭鑑録』の内容を概観しておこう。『鄭鑑録』は諸秘記が集められた書物であり、18世紀の朝鮮に登場した。『鄭鑑録』中の「鑑訣」は鄭鑑と李沁が朝鮮の国運を予言する会話からなっており、当時の李氏王朝が滅び、鄭氏によって復興されることになっている<sup>20</sup>。このように、『鄭鑑録』は改革的なメッセージを内包しており、政治の腐敗に苦しんでいた民衆の期待が投影されたものであった<sup>21</sup>。

### 第二節 東学の展開と日韓併合

1824年10月28日、後に東学の創始者となる崔濟愚（チェ・ジェウ、1824-1864）は朝鮮の慶州に生まれた。前節で確認したように、当時の朝鮮は国内政治の腐敗と西洋列強の侵入によって社会的混乱に陥っていた。そんな中、国内的には封建制度を批判する平等思想<sup>22</sup>と政治の腐敗を打破しようとする革命の理念、国外的には西洋と日本の侵略に対する憂慮を背景に東学は誕生した<sup>23</sup>。修行中の1860年、神の啓示による神秘体験から崔濟愚は東学を創道する。以降、1861年より約3年間、教義をあらわした書物を執筆する。当時の身分社会において、儒教に代表される朝鮮宗教の主要経典は漢文からなっており、漢字が

享受できる両班（ヤンバン）を中心に広がったため、百姓のためのものではなかった。しかし、崔濟愚は教義を漢文の『東經大全』とハングルの『龍潭遺詞』に残し、知識層のみならず、百姓にも東学を伝えようとした<sup>24</sup>。創道から朝廷に逮捕されるまでの間に教勢は拡大したが、民衆を惑わせたという罪で 1864 年に崔濟愚は処刑される。

崔濟愚の没後、東学は朝廷による弾圧が緩む 1890 年代までの約 30 年間、公然たる活動をしなかった<sup>25</sup>。しかし、1892 年、教徒たちによる教祖の伸冤（無実の罪の怨みを晴らすこと）の要求に応じ、二代教主である崔時亨が公的空間における活動を開始する<sup>26</sup>。1893 年 11 月、官吏の横暴に抵抗する形で、全羅道の古阜、全州、益山で民乱が起った。前年の伸冤運動の影響もあり、勢力が拡大した東学軍を自力でおさえることができないと判断した朝廷は清国に救援兵を要請し、それに応じて清軍が来朝する。これをみた日本は、1885 年に締結された天津条約<sup>27</sup>を理由として軍を派遣する。朝・清・日の連合の力に対する劣勢から、東学軍は敗北し、指導層は逮捕・処刑される。東学軍の鎮圧により日清両軍は朝鮮駐留の名分を失い、撤兵交渉に入った。朝鮮政府も両軍の撤兵を求めた。しかし、朝鮮の支配権をめぐる清との争いに決着をつけたかった日本は、日清両国による朝鮮の内政改革を提案する。清は内政改革案を拒否し、日本は朝鮮の閔氏政権を打破して親日開化派に実権を握らせる。同時に、朝鮮に駐屯していた清軍を攻撃することによって日清戦争がはじまる。朝鮮内での勝利によって清軍を退けた日本は朝鮮への支配権を確保することになる<sup>28</sup>。1895 年 4 月 17 日、日清講和条約が結ばれて清と朝鮮の従属関係が破棄され、朝鮮が独立した。したがって、日本は朝鮮に対する支配を徐々に強化していった。しかし、ロシア、ドイツ、フランスは日清講和条約を無効にして朝鮮への干渉を行い、日本の朝鮮進出は日清戦争以前より弱化した。とりわけ、ロシアが積極的に朝鮮進出をはかった<sup>29</sup>。満州・朝鮮の経済支配権をめぐる対立は日露戦争に発展するが、結果は日本の勝利となり、日本は朝鮮を植民地支配することになる<sup>30</sup>。

1898 年、崔時亨は逮捕後処刑されるが、その前に孫秉熙を指導者と任命している<sup>31</sup>。以降、孫秉熙は東学を天道教に改称する 1905 年まで、日本や上海を外遊しながら文明開化にもとづく朝鮮の近代化を強く意識するようになる。

### 第三節 東学にみられるメシア信仰

前節の内容から分かるように東学は反封建・反外勢的な性格をもって展開された。本節では東学にみられるメシア信仰の性格を確認したい。

『鄭鑑録』は鄭氏による李氏王朝の滅亡を予言する内容からなっている。しかし、その方向は示しているものの、表現が抽象的であるがゆえに、具体的な状況を特定することはできない。つまり、解釈する者の意図や主観によって意味が変わるといえる。そのため、朝鮮の変革を夢見た人の多くが『鄭鑑録』に登場する英雄と名乗って革命を試みた<sup>32</sup>。東学が『鄭鑑録』の影響を受けたのは自然な流れだっただろう<sup>33</sup>。趙景達によると、東学は単に『鄭鑑録』の影響を受けただけでなく、独自の教えも説いている。『鄭鑑録』の予言が

受動的にメシアの出現を待ち望む内容になっているのに対して、東学は仙薬の服用と修行をすることによって誰もが真人<sup>34</sup>になれると説いている。このような東学の思想は一人の真人の出現によって世が変わるという『鄭鑑録』の内容とは異なり、あらゆる人間の「真人化」が可能であるという解釈ができる<sup>35</sup>。前述のことは、独自の教えを加えながら、東学がメシア信仰にもとづく革命的性格をもっていたことを示唆する。

#### 第四節 天道教の誕生と展開—三一運動まで—

本節では、東学が天道教に変わる過程を確認した上、1919年に行われた三一運動と天道教を関連付けて分析する。三一運動に注目する理由は、吉野作造が天道教に注目した契機だと考えられるためである。

崔時亭の死後、孫秉熙が東学を率いるようになり、その過程で東学は新しい方向を模索した。1901年から1905年の間に日本と上海を往来しながら東学の復興を考えた孫秉熙は、文明開化を通じた朝鮮の近代化の必要性を強く意識するようになった。日本滞在の際には朝鮮の東学教徒に指示を下しながら活動を続けた。その中の一つが国民の開化を促進するための民会の組織であった。幾つかの民会が組織されて活動が行われ、特に進歩会を中心に開化運動が展開された。しかし、開化運動が東学教徒によって主導されたことを知った朝鮮政府は東学を弾圧する。したがって、進歩会の会長であった李容九（イ・ヨング）は、孫秉熙の認可を得ず進歩会を親日組織であった一進会と統合して親日活動を開始する（筆者注—新組織の名前は一進会）<sup>36</sup>。後に報告を受けた孫秉熙は1905年12月1日の帝国新聞に広告を載せ、天道教の誕生を知らせる（写真1参照）。



写真1 天道教誕生の宣言  
(帝国新聞 1905年12月1日)



写真2 天道教本部  
(2015年10月1日撮影)



写真3 天道教中央大教会  
(2015年10月1日撮影)

1906年に朝鮮へ帰国した孫秉熙は天道教を近代的な制度宗教に改革していく。まず「天道教大憲」を制定して全国の信者に配布した。また、組織の中央に天道教中央総部、地方においては教区を設けることによって教団組織を整備する。さらに、信者から一定の米を供給してもらう形の誠米制を確立して教団運営の安定をはかった。とりわけ、教育を通じて民衆を啓蒙するという方針にもとづき、教育・出版事業に力を入れる<sup>37</sup>。前述のことで分かるように、天道教は教団内部の改革を推進するとともに朝鮮人を近代化させるためにつとめた。このような活動は進歩会の分離によって弱まった教勢を再び伸長させた<sup>38</sup>。天道教として新たに出発した時期から1910年代にかけて行われた民衆を対象にする啓蒙運動は、宗教的理念と民族主義が合わさった実践だといえる。その延長としてあらわれたのが1919年の三一運動である。

1919年、第一次世界大戦の講和条約であるベルサイユ条約が締結された際、当時のアメリカ大統領のウィルソンは民族自決を提唱した。これに触発され、1919年3月1日に植民地朝鮮で三一運動が展開される<sup>39</sup>。三一運動は、33人の民族代表が朝鮮の独立を宣言して万歳を叫んだことで広がった朝鮮の独立運動を指す。33人の民族代表の内訳は、キリスト教16人、天道教15人、仏教2人であり、運動を主導したのは天道教であった<sup>40</sup>。民族の啓蒙を通じて国力の強化をはかろうとした天道教は、朝鮮が日本に支配・併合される流れの中で朝鮮の独立を実現させるために働いたのである。天道教のこのような活動は、宗教的理念にもとづく理想世界建設といった実践が民族主義と重なり合って、祖国朝鮮の独立のための運動に発展したとみることができる。

## おわりに

吉野作造は1904年に朝鮮人留学生の李殷徳と出会うことによって朝鮮への関心が高まった。その後も朝鮮人留学生との関係は吉野の朝鮮観に影響を及ぼす。とりわけ、1916年の満韓視察を終えてからは、形にとどまる同化政策ではなく朝鮮人への待遇改善や宗教的理念にもとづく実践から日本人と朝鮮人が友好的になることの必要性を提唱するようになった。朝鮮の独立が唱えられた三一運動の勃発後は、三一運動の背後に興国思想があってその主体が天道教であると考えた。

天道教は朝鮮末期に流布していた『鄭鑑録』のメシア信仰に影響を受けていた。『鄭鑑録』から東学に受け継がれるメシア信仰の性格は、腐敗した朝鮮王朝の打破と改革が中心にあった。しかし、日韓併合の後においては日本に奪われた国権を回復するという方向に変化したといえる。それが明確にあらわれたのが三一運動であった。

三一運動が勃発する以前から、宗教的実践が民衆に与える影響の重要性を吉野は意識していた。天道教の主導で行われた三一運動を目の前にした吉野は、支配国の日本と植民地朝鮮との不協和音を解消して友好的に共存するためには、国家や民族を超越した宗教的実践、また、被支配側の背景にある宗教的思想の理解が前提であると考えたのではなかろう

か。もしそうであるならば、吉野の朝鮮観は天道教が内包していたメシア信仰に影響を受けたといえるだろう。

- 1 吉野の評価は諸論があり、一面的に論じるのは難しい。佐藤太久磨は先行研究による吉野の評価を、帝国主義と植民地統治論を巡ったものに整理している。前者は帝国主義に対する反応から「帝国主義者」として評価するものであり、後者は植民地放棄論者ではないが、提携を通じた新たな植民地統治技法を提示した「帝国改造」論としての評価軸である。しかし、いずれも「意義か限界か」の二者択一的評価か「意義と限界」の二重評価に収斂される傾向があると佐藤は指摘している。佐藤太久磨、2015、「吉野作造の今昔と日本近代史」、第9回吉野・韓国研究会発表原稿、2頁。
- 2 その後、李殷徳は札幌の農科大学に入り、連絡が途絶えた。吉野作造、1929、『日本無産政党史論』、一元社、327-332頁。松尾尊允、1998、『民本主義と帝国主義』、理想社、129-134頁。田中惣五郎は、朝鮮問題研究所とのかかわりが、吉野の一生にわたるアジア人青年への関心の第一歩であると分析している。田中惣五郎、1971、『吉野作造』、三一書房、70-75頁。
- 3 1906-1909年の中国生活、1910-1913年の欧米留学がその間にあった。前掲『民本主義と帝国主義』、134頁。
- 4 このときに吉野が知り合った朝鮮人青年の中には1919年に勃発する三一運動に深くかかわる人物もいた。前掲『民本主義と帝国主義』、178頁。
- 5 たとえば、「満鮮旅行の感想—日本宗教家の奮起を望む」（3月）、「満韓の旅」（5月）、「満韓を視察して」（6月）がある。管見の及ぶ限り、それ以前に朝鮮が題目に入った文章はない。
- 6 吉野作造、「満韓を視察して」（1916年6月）、『吉野作造選集』（第9巻）、岩波書店、3頁。以下、『吉野作造選集』（1巻～15巻及び別巻、1995～1997年、岩波文庫）からの引用は『選集』と表記。引用に際しては、題目、初出年月、『選集』の巻号と頁数の順に記す。
- 7 日本人の朝鮮人差別を止めるべきと主張しながらも一方で朝鮮人に対して亡国の民と表現、自治を論じながら植民地支配そのものは支持、金銭を取られるがゆえに不満があることから言論の自由を付与すべきというなど、相矛盾するような内容の主張が同時にみられるのが吉野の文章の特徴である。
- 8 三一運動に関する日本言論界の反応は松尾が詳しく事例を挙げている。前景『民本主義と帝国主義』、138-149頁。川瀬貴也も、吉野のように日本の同化政策に批判的だった思想家は少数派であったと指摘する。川瀬貴也、2009、『植民地朝鮮の宗教と学知—帝国日本の眼差しの構築—』、青弓社、85頁。
- 9 前掲「満韓を視察して」、28-29頁。
- 10 傍点は省略。前掲「満韓を視察して」、35-39頁。
- 11 川瀬は「満鮮旅行の感想—日本宗教家の奮起を望む—」より、「宗教」（キリスト教）が過度に国家権力と結びついている日本の現状に対する批判が表れていると分析している。前掲『植民地朝鮮の宗教と学知—帝国日本の眼差しの構築—』、83-84頁。
- 12 「満鮮旅行の感想—日本宗教家の奮起を望む—」1916年6月1日、『基督教世界』（第1704号）、基督教世界社。
- 13 「朝鮮統治の改革に関する最小限度の要求」、1919年8月、『選集』（第9号）。
- 14 1916年には直接天道教本部を歴訪している。吉野作造、「朝鮮問題に就て（1-3）」、横浜貿易新報（1919年6月12日-15日）。また、『国家学会雑誌』に1919年5月より6回にわたって天道教研究資料を掲載している。吉野作造、1919年5月『天道教』研究資料（一）、『国家学会雑誌』（第387号）、東京帝国大学法学部経済学部。
- 15 類似する日本の例として、当時の日本で大本教が綾部において救主が出現すると流布したことを提示している。「亡国の予言—鄭鑑録—日本と朝鮮との交渉に関する研究の—」、1921年6月、『選集』（第9号）、176-177頁。前節で確認したように、吉野は宗教的理念やそれにもとづく活動の影響を高く評価している。日本にも似たような例があったため、挙国的に展開された三一運動の背後に宗教的理念や宗教団体が介入したと吉野は判断したのだろう。このことは、実際に三一運動の民族代表のほとんどが宗教関係者であったことから理解できる。日本の新聞なども天道教とキリスト教が三一運動を主導したと報道している。前景『民本主義と帝国主義』、138頁。東学と天道教を解説している吉野の著作は1921年6月から8月まで、3回にわたって執筆された。これは三一運動からして2年後のことであるが、三一運動の直後といえる1919年5月から1920年1月まで6回にわたって『国家学会雑誌』に天道教のことを連載している。
- 16 前掲「亡国の予言—鄭鑑録—日本と朝鮮との交渉に関する研究の—」、178頁。
- 17 同上、177-178頁。



- 18 「小弱者の意気—日本と朝鮮との交渉に関する研究の三—」、1921年8月、『選集』(第9号)、190頁。
- 19 勢道政治は、権力ある一族のものが権力を壟断する政治を意味する。
- 20 鄭氏は「真人」とも表記される。김우철、2012、「조선후기 변란에서의 鄭氏 眞人 수용 과정:『鄭鑑錄』 탄생의 역사적 배경」、『朝鮮時代史學報』(第60号)、朝鮮時代史学会、73쪽(キム・ウチョル、2012、「朝鮮後期変乱における鄭氏眞人の受容過程—『鄭鑑錄』誕生の歴史的背景—」、『朝鮮時代史學報』(第60号)、朝鮮時代史学会、73頁)、『鄭鑑錄』の登場以前も弥勒信仰、風水を基盤にした思想が民衆の期待と結合して民乱の背景となることがしばしばあった。また、『鄭鑑錄』は数百年間禁書とされる中で膨大な写本が生まれ、伝播過程において内容と形式が変化してきた。
- 21 윤병철、2005、「정감록의 사회변혁 논리와 사회적 의의」、『정신문화연구』(第98号)、한국학중앙연구원、111-115쪽(ユン・ヒョンチョル、2005、「鄭鑑錄の社会変革論理と社会的意義」、『精神文化研究』(第98号)、韓国学中央研究院、111-115頁)。
- 22 初代教主の崔濟愚は「侍天主」で、超越的存在である天主(東学の神)の存在をあらわし、信じることを主張する。天道教中央総部編、2007(1993)、「呪文」、『天道教經典』、天道教中央総部出版部。二代教主の崔時亨(チェ・シヒョン、1827-1898)は「人是天天是人人外無天天外無人」と、神と人間が同じ存在であることを強調している。前掲『天道教經典』、「海月神師法説—天地人・鬼神・陰陽」。三代教主の孫秉熙(ソン・ビョンヒ、1861-1922)は「人乃天」という言葉で神が人間に内在していることを説いている。前掲『天道教經典』、「義菴聖師法説—大宗正義」。このように、神が人間の中にあるという教えは、人間同士の身分を超越しようとする試みであるといえる。とりわけ、封建社会の朝鮮において平等主義を唱えるのは画期的な発想であっただろう。この平等主義は、東学から天道教へ教義的に継承・展開された。
- 23 西洋の場合は英国と米国による開港(1854)、日本の場合は壬辰倭亂(1592-1598、日本でいう文禄・慶長の役)に代表される侵略に起因するものであり、当時の朝鮮人に否定的な対日観がみられるのは珍しくないとユン・ソクサンは分析している。윤석산、2004、『동학교조 수운 최제우』、도서출판 모시는사람들、252-258쪽(ユン・ソクサン、2004、『東学教祖水雲崔濟愚』、図書出版モシヌンサラムドゥル、252-258頁)。
- 24 前掲『東学教祖水雲崔濟愚』、180-189頁。諸著作は、二代教主の崔時亨によって『東經大全』に整理され、經典とされる。
- 25 二代教主となった崔時亨は、転々と逮捕を逃れながら活動した。吳知永(梶村秀樹訳注)、1970、『東学史—朝鮮民衆運動の記録—』、平凡社、71、110-111頁。
- 26 朝鮮史上初の宗教的抵抗に脅かされた朝廷は、清軍の力を借りたほうがよいと判断した。これは日清戦争の背景になったといえる。신복룡、1996、「동학농민운동」、한국독립운동사연구소편、『한국 독립운동사사건—총론편(상)』、독립기념관、119-121쪽(シン・ボクリョン、1996、「東学農民運動」、韓国独立運動史研究所編、『韓国独立運動史事典—総論編(上)』、独立記念館、119-121頁)。しかし、『鄭鑑錄』は苦しい現実を克服するための民衆の願望からなっており、社会的危機が起こる度にその内容が変化して信仰されたことに注意する必要がある。
- 27 朝鮮出兵の際、日清両国は相互の了解を得て出兵する主旨の条約。
- 28 趙景達、2012、『近代朝鮮と日本』、岩波書店、99-108頁。
- 29 同上、125頁。
- 30 同上、164-186頁。
- 31 前掲『東学史—朝鮮民衆運動の記録—』、287-290頁。
- 32 代表例として、1811~1812年に洪景來の反乱がある。朝鮮末期には民衆による変乱が多発した。それらのすべてが『鄭鑑錄』に仮託していたとは言えないが、多少の差こそあれ『鄭鑑錄』の影響を受けていると考えられる。趙景達、2002、『朝鮮民衆運動の展開』、岩波書店、30頁。
- 33 たとえば、崔濟愚が上帝(天主)より授かった仙薬は「弓弓乙乙」字を書いた紙片だが、「弓弓乙乙」が『鄭鑑錄』に便乗したものであり、貴き人と賤しき人が天運によって逆転する思想がある点に『鄭鑑錄』の影響がみられる。前掲『朝鮮民衆運動の展開』、31頁。
- 34 真人は『鄭鑑錄』に登場する言葉であり、腐敗した朝鮮を正して改革させる人のことを指す。
- 35 崔濟愚は修養を真人になるための前提としながら民衆の真人化の可能性を唱えた。しかし、民衆がそれを叶える可能性は低いと考えていたため、実際の真人は崔濟愚一人ということになると趙景達という。前掲『朝鮮民衆運動の展開』、31-32頁。
- 36 官憲の調査によって朝鮮内の活動に制限があったことも外遊の背景である。임형진、2008、「천도교의 성립과 동학의 근대화」、『동학학보』(제16권)、동학학회、96-100쪽(イム・ヒョンジン、2008、「天道教の成立と東学の近代化」、『東学學報』(第16卷)、東学学会、96-100頁)。
- 37 儀礼・儀式においても近代化が行われたとイム・ヒョンジンは指摘する。詳細は前掲「天道教の成立

と東学の近代化」101-118頁参照。

<sup>38</sup> 日本側の調査によると、1911年現在、約3百万人の信者がいることになっている。朝鮮総督府編、1972、『朝鮮の類似宗教』、国書刊行会、61頁。

<sup>39</sup> 前掲『植民地朝鮮の宗教と学知－帝国日本の眼差しの構築－』、129頁。

<sup>40</sup> その理由は、植民地期において政治団体の結社が禁じられたが宗教団体の結社は可能であったことが挙げられる。